

日本を含めインドから仏教が伝わった国々では、お釈迦さまをはじめとするさまざまな仏像を見ることができます。

お釈迦さまが亡くなられてすぐには、仏像は造られませんでした。そのかわりに、お釈迦さまのご遺骨いこつ まつを祀った仏塔ぶつとう「ストゥーパ」が各地に造られました。

また、お釈迦さまの教えを八方はっぽうに広めることを車輪ほくりんの形で示した「法輪」、あるいはお釈迦さまがその下でお悟りを開かれた「菩提樹ぼだいじゆ」、お釈迦さまの足跡あしあとをあらわした「仏足石ぶつそくせき」など、お釈迦さまを象徴するものであらわされていました。

お釈迦さまはお亡くなりになる前、弟子のアーナンダに、「私がいなくなったとしても、自分自身よを拠り所として、教えである「法ほふ」を拠り所として修行を続けて行くように」と示されました。この言葉の意味を深く受け止めていたからこそ、お釈迦さまのお姿をそのままに表現して祀ることがはばかれたということでしょう。

後年こうねん、アレキサンダー大王がインドに進軍して以来、北インドのガンダーラ地方にギリシャ式彫刻の影響を受けた文化おこが興ります。神の姿を像にあらわすことを知る彼らにとって、お釈迦さまの像がないということは不自然なことだったのかもしれない。さまざまな要因も重なり、ここでお釈迦さまの像、つまり仏像が造られるようになります。そのような経緯けいゐから、この地域の仏像はギリシャ・ローマの神の像ぶつぼうに似た風貌ふうぼうをしています。

また、同じ時期、お釈迦さまが説法で歩かれていたインド中部のマトゥラ地方でも古くからのインドの神の像の伝統を受け継ぐ、お釈迦さまの仏像が造られ始めました。やがて、仏像はインド全域に広がり、中国に渡り朝鮮半島を経て、今から1400年前に日本に伝来しました。

現在の私たちが、当然のように仏像に手を合わせておまいりをしていることも、お釈迦さまがお亡くなりになってしばらくは行われておらず、当時は「仏足石」や「法輪」などを見てお釈迦さまを思い、その教えを実践することが仏教徒にとって大切なことだったのです。

お釈迦さまを仏像によって視覚しかくてき的にイメージできる現在の私たちは、はたしてその当時の人々よりも、お釈迦さまの教えしたに親しめているのでしょうか？